



戦中戦後の厳しい時代を、塩谷組は港湾荷役業として乗り切った。二代目社長 塩谷宏朗は生前、少年時代の思い出として「本船からモッコで原料を手漕ぎの伝馬船に積み込み、港に着くとモッコをかついで荷揚げしていた」と、当時の作業風景を語っていた。1949（昭和24）年7月に建設業の許認可を取得した翌年、旭硝子㈱の復活とともに当社も戦後の荒廃のなかから立ち上がり、同年11月には㈱塩谷組を設立して塩谷宏が初代社長に就任した。折から高砂地域は復興への力強い歩みを始めており、当社も土木工事や土砂・物資輸送などに幅広く参画し、地元の復興に貢献した。



初代社長 塩谷 宏



旭硝子㈱名称復帰記念式典



染めた生地を支給された従業員が、それぞれ自分のサイズに合わせて縫ったと伝えられる法被（はっぴ）

## 株式会社 塩谷組として再スタート —— 1950(昭和25)年





馬力とトラックが共存していた輸送風景(昭和20年代)



国鉄曾根駅前に開設した曾根出張所(昭和26年)



曾根出張所全景(昭和26年)

(株塩谷組の設立とともに、国鉄(現 JR西日本) 曾根駅前の印南郡阿弥陀村(現 高砂市阿弥陀1-2523)に曾根出張所を開設した。旭硝子(株)伊保工場で生産された耐火レンガを、曾根駅で貨物列車に積み込むための中継基地とするためである。当初は馬車での運搬が主体となっていたが、オート三輪へ、さらにはトラックヘシフトしていく必要性から、1951(昭和26)年に通運事業および貨物自動車運送事業免許を取得した。また、旭硝子(株)を主とする取引先の工場建設などのニーズに応えるため、兵庫県に総合建設業登録を行い建設事業にも本腰を入れることになった。

## 初の営業拠点 曾根出張所を開設

—— 1951(昭和26)年



塩谷組の就業証明焼印(昭和25年頃)



# 耐火レンガの製造・輸送の請負に従事

—— 1951(昭和26)年

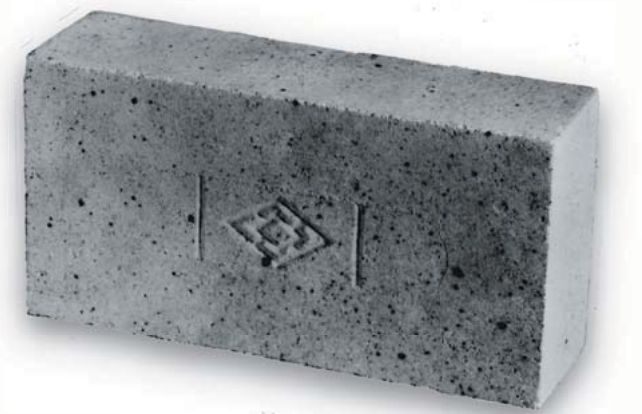


国鉄曾根駅での駅出し風景

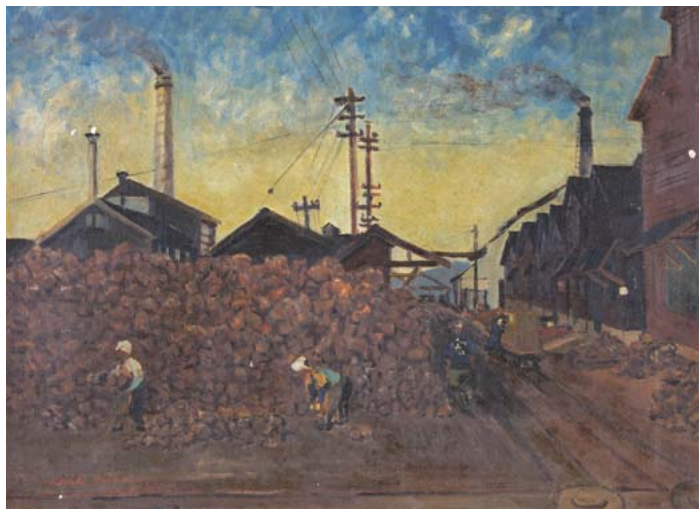


旭硝子㈱伊保工場耐火レンガ原料置場(左ページ油絵の現場)

良質のガラスを安定的に生産するうえで欠かせないのが、ガラスの溶解窯に用いる耐火レンガである。当社は旭硝子㈱伊保工場での耐火レンガ製造を一貫して請負ってきた。船で運ばれてくるシャモットなどの原料をモッコを使って人力で陸揚げし、馬車トロツコに積んで原料置き場へ運び込む。これを成形してトンネル窯で焼き上げるのだが、取り出す際は高温のため特殊な作業手袋をはめ、熱で溶ける心配のない下駄を履いて作業に取り組んだ。完成したレンガは何個かまとめて縄で縛り、手作業で馬車やオート三輪に積み込んで国鉄の曾根駅へ運び込み、各地へ貨物列車で送り出していた。



シャモットレンガの完成品



旭硝子㈱伊保工場でのボーキサイト選別作業風景の油絵(昭和27年)





洗川(法華山谷川)河口にあった旭硝子株式会社伊保工場の専用岸壁(昭和26年)

## 港湾運送事業者として正式に登録

—— 1953(昭和28)年

1950(昭和25)年6月に勃発した朝鮮戦争は、いわゆる朝鮮特需を生み出し、日本経済復興を加速させる効果をもたらした。物資輸送が活発化するにともなって小規模な港湾運送業者が乱立し、また軍需物資輸送の適正化を図る必要性から、1951(昭和26)年に港湾運送事業法が改正され、1953(昭和28)年10月には当社も港湾運送事業者として正式に登録した。自動車の普及率が低かった当時、物資輸送の主力は鉄道輸送か海上輸送であり、鉄道とともに港湾の整備が急ピッチで進められた。それまで人力に頼っていた港湾荷役作業も、徐々にではあるがクレーンなどの導入による近代化が進められていった。



耐火レンガ原料のシャモット水揚げ風景(昭和29年)



旭硝子株式会社伊保工場の専用棧橋修理(昭和29年)



# 新生 高砂市で一級建築士事務所を開設

—— 1954(昭和29)年

建築物の質の向上を図るとともに、公共の安全に大きな影響を及ぼす設計・監理責任を明確化することを目的として、1950（昭和25）年、建築基準法とともに建築士法が施行された。これに対応して、当社でも1954（昭和29）年9月に一級建築士事務所を開設した。建築需要はほぼ100%が旭硝子(株)伊保工場関連である。同年は耐火レンガ製造が本格化し、翌年には尼崎工場のレンガ焼成部門が伊保工場に移管されるなど、工場の新設・増設が相次いだ。なおこの年、印南郡曾根町伊保村および加古郡高砂町荒井村の2町2村が合併して高砂市が誕生している。



旭硝子(株)伊保工場(昭和29年)

旭硝子(株)の今市社宅建設工事(昭和28年)



防塵煙突用杭打工事(昭和29年)